



Title	真理論 -真偽表現の論理的構造を手掛かりとして-
Author(s)	篠原, 駿一郎
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1985, 26(1), p.1-13
Issue Date	1985-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/15205">http://hdl.handle.net/10069/15205</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:25:17Z

## 真理論

### —真偽表現の論理的構造を手掛かりとして—

篠原 駿一郎

## Truth : The logical analysis of truth-falsehood expressions

Shun'ichiro SHINOHARA

### 1. はじめに

この小論で論じようとするのは、経験主義的立場、あるいは、より具体的には、哲学的問題の解決にあたって、言語分析の手法を重視する立場に立った真理論の一端である。

我々の住むこの世界はいわば絶対的所与（The Given）である。絶対的であるということの意味は、それは様々な世界のうちの一つの世界ではなく、そもそもそれしかない世界、従って一つと数えることも出来ない世界であり、また何らかの主観に対して、その知識の源泉として相対的に与えられる所与でもないということである。世界はただここに端的に存在するのである。ここには、我々の心も物質もすべてが含まれる。従って物理的かつ精神的存在者である言葉も、世界の内に分かち難く一体となっており、その中で機能しているのである。だがこの一見混沌とした世界の中で一たび言語を際立たせるや否や、たちまちそれと対時的関係にある豊かな世界が立ち現われる。そしてこの豊かさは、それと相対している言語そのものの豊かさでもあるのである。

この小論は、このような意味での言語と世界という二つの相関関係を基盤にすすめられるであろう。それは、事(言)の端(葉)が用いられ、物が語られる、世界の内で最も実りある関係が成立する場なのである。なぜなら、ここは意味というものが成立する場であるからである。即ち、言語がそれと対時的な世界を首尾よく捉え得たことの評価を示すキーワードこそ“意味”に他ならない。そしてこのような、意味に染められた世界は真偽の様相を帯びて立ち現われる

のである。

我々は、日々、真理を求め虚偽を退けて生活している。もちろんそのように理路整然、清廉潔白ではないにしても、日常茶飯事、真偽を意識していることは確かである。意図せぬ誤った行為も一度は正しい行為と思われたのであり、確信的犯行も正邪を意識せずには成り立たない。(このような行為の場では真偽と善悪は分かち難く結合しているが、ここでは、行為にも真偽が係わりを持っていることを言えば十分である。) また科学者たちが研究室や実験室で日夜追求するのは、一言でいえば真理ということであろう。しかし、このようないわば経験の場(哲学研究の場と対照的な意味で)で問われるのは、“どれが真理なのか?”という個々の真理を求める問いであって、ここで言う真理論を構成しない。諸科学は、それぞれの現場においてその真理基準、即ちどのような条件の下に、あることが真または偽とされるかの基準を経験的蓄積として所有している。このような真偽概念の内包に従って、真なるもののクラス、外延が確定される。それに対して哲学者の問いは、次のようなものである。まず第一に、そのように諸科学が理解しているそれぞれの真偽概念の一般的性質はどのようなものであるかということ。第二に、そのような真偽は何について語られるかということ、即ち、それぞれ経験の場で求められた真理の集合および退けられた虚偽の集合という両集合の和集合は、何の集合であるかということである。小論においては、まず第二の外延的問い、そして第一の内包的問いの順に論じられるであろう。一般的に言えば、概念(後には、ある意味での概念の存在は否定される。)の内包がその外延を確定するのであるが、真理論にあっては、しばしば真偽概念の外延を構成する要素の領域のあいまいさが、それと相関的にその内包をあいまいにし、従って真理論そのものを焦点の定まらないものにしがちである。そのような訳で、ここでは上記の二つの問いの順を逆転し議論の領域を定めることを先立たせることにする。しかしその前に、言語分析の常套に倣い、“真理”、“虚偽”、あるいはそれに類する言葉が使われる現場に目を向けなければならない。

## 2. 真偽表現の現場

とりわけ“真理”および“虚偽”に類する表現は多種多様、凡ゆる理論的価値的判断に適用され得ると言ってもよい。“真偽”、“正誤”、“本当”、“実(まこと)”、“嘘”と、様々に色合いを変えながら用いられる。だがそれらの表現は、

修辭的差異を無視すれば真偽二種の表現であると言えるだろう。もし、これは事柄を単純化しすぎているというのであれば、ここではそのような二値論的立場から議論を進めていくと言う他はない。そこで、それらを今後は“真理表現”および“虚偽表現”、両者を共に指す場合には“真偽表現”と表記することにする。ここには、日常言語におけるそれらの表現の様々な活用形態が含まれる。但しこれからの議論にあつては、真理(表現)、虚偽(表現)のいずれにおいても同じ事態が成立している場合には、真理(表現)についてのみ論じることにする。

さて日常言語においては、真理表現に関して、論理的観点から見ると基本的には次の二つの用法が認められる。その第一の用法は、例えば、“真の英雄”、“本当のダイヤ”、“正しい判断”、“本当の話”といった具体的なあるいは抽象的なものごと、即ち、名詞を真理表現で形容する場合である。この形容句である真偽表現が名詞を修飾する用法を限定的用法と名付ける。そして第二の用法は、例えば、

ソクラテスがプラトンを愛したという事は本当である。

インターフェロンが癌に効くという話は真実である。

アメリカが保護貿易主義に傾いてきているという判断は正しい。

などの例に見られるように、愛情や効果また社会現象といった、名詞節（これは厳密には文ではない。そのことは後に示される。）によって表現されることがが主語となり、それを真理（虚偽）表現で述語づけるやりかたである。これを叙述的用法とよぶことにする。真偽表現が、“神は真理である。”といったように、とりわけ象徴的、暗示的に使われる場合を除いて、以上二つの働きが日常的に基本的な用法と言っていいだろう。またこの象徴的用法の場合でもより具体的に問い直せば結局はこの二つの用法に帰すると考えられる。そしてこの両者を包摂するかたちで真理論が展開されるのでなければ、それは十全な分析とは言えないであろう。そこでまずこの両者の統一的理解が必須となる。

まず前者の用法を見てみよう。例えば、

毛沢東は真の英雄である。

と言うとき、形容句“真の”は他の一般的な形容句と同様の働きをしているだろうか。上の例文の“真の”を、例えば“慈悲深い”、“冷酷な”で置き換えると次の二文が得られる。

毛沢東は慈悲深い英雄である。

毛沢東は冷酷な英雄である。

この文は、この英雄が慈悲深いのか冷酷であるのか、彼の性格についての情報を与えている。だが“真の英雄”という表現を持つ例文にはそのような働きは認められない。“真の英雄”とは、情報の内容としてはただ“英雄”というにすぎず、“真の”は何らこの英雄に新しい特性を付け加えるものではないだろう。なぜなら、“真の英雄”が英雄の一つの性質を述べるものであるなら、その否定表現“偽りの英雄”もまた英雄のある性質を語るものとなろう。だが、“偽りの英雄”によって我々が普通に理解しているのは、それが英雄でないということであり、決してその英雄が偽りという特性を持っているということではなからう。同様に、“本当のダイヤ”とは“ダイヤ”であり、“偽（にせ）のダイヤ”とは“ダイヤではない”ということであり、“偽のダイヤも一種のダイヤである”などと言うのは詭弁であろう。それゆえ、大きいダイヤがあったり小さいダイヤがあったりするという意味で、本当のダイヤや偽のダイヤがあるのではない。このような例にみられる真理表現は、従って、他の一般的な形容句の持つ働きはないことがわかる。

この特異性は、次のような事情によっても理解される。例えば、

あれは慈悲深い英雄だ。

これは大きいダイヤである。

といった限定的用法の形容句は、次のように、そのまま叙述的用法でも使われる。

あの英雄は慈悲深い。

このダイヤ大きい。

しかし真理表現については、このような、限定的用法から叙述的用法への転換は行なわれないのが普通である。例えば、

あれは真の英雄だ。

これは本当のダイヤである。

のような文は、

あの英雄は真である。

このダイヤは本当である。

といった表現になると、意味は理解できないことはないとはいえ、やはり不自然であろう。この場合、

あの英雄は本物である。

このダイヤは本物である。

の方がより自然であろうが、ここで用いられている“本物”とはそれぞれ“本

当（真）の英雄”や“本当のダイヤ”のことであり、真理表現が本当に叙述的に用いられているとは言えないであろう。このような事態は、ここに例示したような一般的具体的なものを表わす名詞だけでなく、“富士山”、“太平洋戦争”といった固有名詞、あるいは“平和”、“愛”のような抽象名詞に関しても生じるのである。

さてこれまで第一の用法にあって、真理表現が一般の形容句とは働きを異にする場合をみてきたが、同じ真理表現によって修飾される名詞でありながら、その真理表現の働きを他の形容句と同様にしてしまうような一群の名詞がある。例えば、先に挙げた“判断”や“話”、それに“評価”、“批判”、“説得”、“説明”、“情報”、“主張”、“告白”といった表現がそれである。即ち、真の判断も偽の判断も判断であり、真偽は判断の性質を述べている。また、

あれは正しい（真の）判断である。

あの判断は正しい（真である）。

のような転換も可能である。物事を表わす名詞のうち“英雄”や“富士山”、“平和”を“物表現”と呼ぶならば、ここに挙げられた一連の語彙は“事表現”と表記していいだろう。事実、“事”という表現そのものが、

あれは本当の事である。

あの事は本当である。

というように、真理表現が一般の形容句と同様の働きをするのを許すのである。もちろん物表現と事表現という二つの表現群を峻別するラインがある訳ではない。日常言語のあいまいさ、あるいは繊細さを反映し、両表現の間には様々な語彙が並んでいるであろう。とはいえ大きな傾向としてこの区分が可能であることに変わりはない。

次に真理表現の第二の用法、叙述的用法に移ろう。先に挙げた例文にあるように、“ソクラテスがプラトンを愛したという事”や“インターフェロンが癌に効くという事”、また“アメリカが保護貿易主義に傾いてきているという判断”といった名詞節（英文法では、厳密に言えば、名詞とそれと同格の名詞節）はこれらの表現の語尾が示しているように、文そのものではなくて、第一の用法のところで述べた事表現の一種に他ならない。言語分析的真理論でしばしば用いられる、

“ソクラテスはプラトンを愛した”は真である。

といった表現は、それぞれ哲学的意図を含んだものであるにしても、少なくとも日常言語の分析としては適切なものではない。文を主語とする文は、例えば、

“ソクラテスはプラトンを愛した”は漢字仮名まじり文である。のような、文の表記に関する文であって、決して真偽を語る文ではない。これは逆に、

ソクラテスがプラトンを愛した事は漢字仮名混じり文である。といった表現が意味を欠くことから明らかである。真偽表現によって述語づけられるものは名詞節、即ち、文が名詞化されたものであって文そのものではない。その意味でこの主語となる表現は、第一の用法の事表現と論理的に全く身分を同じくするものなのである。

さて、これまでの議論で明かになったことは、真偽表現は、文そのものと係わることはなく、物表現を修飾するか、または、事表現を修飾するかあるいはその述語となるということである。そこでこの真偽表現の、物表現と事表現の両者との係わり方の統一的理解が次の課題となる。先に見たように真偽表現が物表現と係わる場合には、真偽表現は他の一般的な形容句や述語句と異なる働きをもっていた。しかしこのことは次のように考えることができる。例えば、

毛沢東は真の英雄である。

のような、真理表現が物表現を修飾する文は、

毛沢東が英雄である事は本当（真）である。

のように、事表現を真理表現で述語づける文に読み直す方が、事態をより明かにしているといえないだろうか。このように見れば、真偽表現はすべて、基本的には事表現と係わるということになり、普通の形容句や述語句と同様な言語の一般的特性を分け持つこととなるからである。ここで事表現とは何か整理してみよう。それはまず、“事”、“判断”、“話”、“評価”、といった表現。それから、“———という事（判断、話、評価）”の形の表現である。この両者は、前にも述べたように、論理的に同一のものである。それは例えば、

あの（アメリカが保護貿易主義に傾いてきているという）正しい判断は———である。

あの（アメリカが保護貿易主義に傾いてきているという）判断は正しい。のように、括弧の、文を含む表現が、暗に（Implicitに）あるいは明白に（Explicitに）、必要に応じて示されることからわかる。これで、本節の目的であった真偽表現の統一的理解ということが達成されたことになる。

### 3. 真偽の担い手（外延的問い）

前節で定義した事表現は、換言すれば、文の含みを持った名詞と言うことも

できる。“————という判断（話）”という形をとる事表現にしる、“判断や“話”といった事表現にしても、そこに何らかの文が明示あるいは暗示されている。ここに、文を真偽の担い手とする誤解の源がある。しかし、真偽が問われるのは文そのものではなく、文の含みをもった事表現によって了解されているところの事である。この事表現によって理解されている事を、“事対象”と表記することにする。（従って物表現に対応するものを“物対象”と名づける。）例えば、

インターフェロンが癌に効く事は本当である。

においては、ある事対象が、即ち、インターフェロンが癌に効く事が真であるということの意味しているのである。事表現は真理表現と主述の関係にあるが、真あるいは偽であるのは事対象である。もちろん事表現が真又は偽なのではない。なぜなら、

“インターフェロンが癌に効く事”は——である。

のような表現は表記に関する文であって、前に述べた理由によって、真偽を述べる文ではないからである。

さてこうして、初めに述べた、真偽に関する外延的問いに対する答えが与えられた。即ち、真偽を担うものは全ての事対象である。つまり事対象の性質が真であるとか偽であるとか言われるのである。あるいは事表現に対峙する事対象こそ真偽を問いうる対象であると言ってもよいであろう。

次に、この事表現と事対象との対峙関係についてもう少し論じよう。それによってこの真偽を担う事対象の本質がより明かになるからである。

事表現を発することによって、事対象は実なるものとして現われる。即ち実現 (Realize) する、あるいは、される。これは同時に、私とその事対象を対象として了解 (Realize) するということである。英語の表記が示唆するように、どちらも同じリアライゼーション (Realization) である。真なる事も偽なる事も等しく事対象として存在するのである。日本が太平洋戦争に負けた事も勝った事も存在する。また、この存在者は普通の意味の知覚の対象に止らない。ギリシャ神話のペガサスが天を駆けるという事は想像的に存在するし、アレキサンダーの愛馬ブケファルスが地を駆ける事は伝聞的に存在する。それは昨年のダービーを制した駿馬がその時は知覚的にそして今は思い出的に存在するのと同じ意味での存在者である。このような存在者間に存在論的身分の差を設けるべきでない。それはまた、事表現と事対象の間に、表象、概念、命題といった抽象的存在者を考えるべきではないし、その心要もないということでもある。

事表現によって対象は直に存在者として立ち現われる。そのような存在者を実現了解させ得る事表現とは、意味のある表現だということである。しかし、意味の有る無しを決めるのは文法ではない。人間としての思考認識の様式がある表現を有意味としてまた無意味として退ける。例えば、“ソクラテスが平和を愛飲したこと”は、文法に叶った表現であるが、これにはいかなる事も対応しない。しかし、“ソクラテスがプラトンを産んだ事”は、一つの事を意味している。そして意味ある事表現とは、そこに語られている何らかの事対象が必ず存在するということである。逆にそのような存在者を持たない表現は、事表現として用いられていないと言ってよい。事表現の有意味性と事対象の存在性とは表裏一体、一つことの異なる把握の仕方にすぎない。正確に言えば、粘土板に刻まれた模様やノートのインクのしみ、鼓膜を震わせる音の振動といったものは、それだけで事表現であるのではない。それが意味あるものとして用いられて、即ち、それに対応する事対象が実現了解されて初めて事表現であると言えるのである。つまり、用いられていない言語は、厳密には、言語ではないということである。例えば、古代文字の解読とは、そこに存在する言語の解読ではなく、その粘土板の模様がどのように言語として用いられたかを明らかにしようとする研究であると言える。さて、このように事表現に対峙するのは唯一事対象という存在者であるが、そのような存在者に関してリアライゼーションが成立した段階では、論理的に言って、まだ真偽は問われてはいない。一つの事が事対象として実現了解されて、次にその事の真偽が問われるのである。従って、例えば、ペガサスが天を駆ける事は、その事が実現了解された段階では、真でも偽でもない、予備的な段階である。それがどのように真偽と係わるかは次節で論じられる。

さてこのような事対象に対して、物対象は実現も了解もされないし、従って、真偽が問われることもない対象である。第二節で論じたように、真の“英雄”といった表現は事表現に読み直されるのが自然であるし、また、“富士山”といった名詞によって何か了解されていると思われるならば、それは、富士山が美しかった事、私が富士山に登った事、として了解し、またその事対象が想起的存在者として今ここに実現しているのである。

一方、真偽は文の性質ではないということから、例えば、

アメリカが保護貿易主義に傾いている。

といった文そのものによっても、ここでいうリアライゼーションは成立していない。このような文を発するとき、我々は心を込めて言い、あるいは、気持ち

を込めて表情を作る。その声振り身振りを見て人はそれが真だと言われているのだということを知る。即ち、単なる文の発声は、それに込められた思いと相俟て、

アメリカが保護貿易主義に傾いている事は真実だ。

といているに等しいのである。その意味では真偽表現は余剰であると言うより、むしろ、真偽表現は省略されることが多いと言うべきである。

#### 4. 真偽の意味（内包的問い）

さて、真偽が事対象について語られ、その事対象の様相が以上のようなものであるなら、真偽の意味、即ち、真偽についての内包的問いに対する答えも、自らその事表現—事対象という構図の内において考えられるであろう。以下それを見ていこう。

真理とは何か。真理表現に端的な定義を与えることは困難なことである。しかし、それはこの表現の複雑さの故ではない。例えば、“真である”という語にどんな同義語を置換できようか。確かに真理表現は、既に述べたように、様々な表情を持って現われる。しかし、そのどれもが余りにも明らかで単純な表現である。“晦渋”を“むずかしくてわかりにくいこと”と言って説明するように、真理表現を熟知した語に置き換えることは不可能である。我々は、言語を習い始めると同時に真理表現を使い始めたのであり、謂わば直示的にそれを学んだのである。真理は真理と言う他はない。“真偽”や“善悪”、“美醜”といった表現には、それ以上その意味を問うことを許さない絶対性があり、そのような表現は、かえって、その内包そしてその外延をも不明瞭にされる危険が常に存するといつてよい。即ち、多種多様なことがらが論者の恣に真理であると呼ばれることになりがちである。従って、ここまで論じてきた立場からすれば、真理の意味が問われている時、我々が明らかにし得るのは、いかなる条件の下にどういう基準に依って真理が語られるかということである。そのこの事情を詳らかにすることに我々は無関心ではありえない。なぜなら、世界を理解しようと努め、それと係わりをもって生きていく生活の中で、我々にとって重要なのは真理表現そのものの定義ではなく、いかなる事(対象)を“真理”と呼びまた“虚偽”と呼ぶかということだからである。そのような意でこの内包的問いは理解されなければならない。

さて、事表現にはそれに対応して常に事対象（それは真偽のいづれでもあり

うる。)が存在するとすると、いわゆる真理の対応説を採れないことは明らかであろう。この対応関係は、実現了解 (Realization) という必然的不離の関係であり、しかも、事表現一事対象の世界構図の中では、このリアライズされた事と比較すべきその写しのようなものは存在しないからである。事表現に対応する事対象が存在するときその表現は真であるというのならば、全ての事表現は真である。しかしそのような真理表現の分析は、言葉の分析として自然なものではない。我々の立場は、真理表現も、他の一般的な表現と同じように、虚偽表現という反対表現を持ったものとして捉え、そこからこの分析を始めているからである。一つの事対象は他の諸々の事対象との相関によって真あるいは偽となるのであり、それを決定するのは最終的には、人間の、生物的、社会的存在者としての実践的な要請に基づいてである。ある事表現によってリアライズされる事対象は、人々によって永く信じられ広く社会の中で役立つてきた事であり、また大きな権威によって主張されている事であろう。そしてそのような事対象と一致するような事が新に表明されたなら、後者の事対象は真だといわれ、一致しないような事ならば偽であるといわれる。かつて太陽は地球を廻るという事が信じられた。この事は我々の知覚によって確信され、また教会の権威によって支持された。従って、この頃のガリレイの眩きが主張している事も偽であったのである。しかし権威は科学者の手に移り、様々な観察や理論に基づいて主張される事との相関によって、大地が動くというコペルニクスの確信した事は真だとされるようになったのである。そして地球が動いていないように見えるという事は、われわれの錯覚であり、従って誤りであるとされたのである。この地動説が正しいという現代の見解は、科学理論全体の有用性を認めるという実践的要請に基づいているが、一方で日常生活での有用性から天動説もまた真理であると我々は素朴に考えていると云ってよいであろう。

もう一つの例を見てみよう。外出から帰った妻が、

雨が降り出したわ。

と言う。私にはその声を聞くとともに一つの事、即ち雨が降り出した事が実現しそして同時に私はその事を了解する。もちろんこの実現了解は、前に述べたように、一つことである。私は読みさしの本を置き外を見る。そして“ああ雨が降り出した(事は本当だ)な”と眩く。たとえ眩かなくても、ある事が実現了解されている限り、そこに事表現が無言のうちに語られていると云ってよい。そして今私が了解した事は知覚的に実現したのであって、妻の発言によって伝聞的に実現した事よりも有用なのである。それは、我々が知覚的なリアライゼ

イションの方が重要であるという生き方をしているからである。そしてこの有用な事と比べて一致していたので、妻の言った伝聞的な事を本当だと言ったのである。

こうして、事対象は、その有用性、社会的権威、といった実践的要請に基づき、他の諸々の事対象との整合性によって真偽が決定されるのである。ある事対象の真偽を主張することは、“そうだ”、“ちがう”と言ってその事を引き受け、また拒絶して生きるということである。

以上の例は、そこで主張されている事が他の事と比較対照され、それとの整合不整合が厳しく問われている場合である。このような場合にはその事の真偽が殊更強く表現される。第3節で述べたように文はそれだけでは事の実現も理解もないのであって、そこに込められた思いによって真偽を主張しているのである。しかし、主張される事対象が他の諸々の事対象と矛盾することもなく平滑に受け入れられ且つそれら他の事対象の中に組み込まれていく場合にはその事が真であることはわざわざ主張されないうちまたの方が自然である。例えば、マラトンでの勝利をアテネ市民に最初に伝えたギリシャの勇士は、

わが軍が勝った事は真だ。

とは言わなかったであろう。この伝えられた事対象は市民に待ち望まれていた事であり、また、他の事対象と矛盾なく受け入れられる事だったから、

わが軍勝てり！

で十分だったのである。このような場合、真理表現は、修辞学的には確かに余剰であろうが、論理的にはこれは必要な表現である。ただそのことを人々はこの勇士の表情から読みとるのである。

## 5. おわりに

一般に真理論では、様々な真理表現のうちある特定のものだけを採り上げて理論が構成されていくのが常である。日常言語の分析を手掛かりとする真理論でも、“真の英雄”、“真の判断”といった真理表現は、いわば、本来の使い方から外れたものとして等閑に付されることが多い。しかしそのような表現は明快な意味を持っており有用に機能しといる以上、それを真理論に組み込まなければそれは完全な理論とは言い難いであろう。私がここで論じようとしたことは、まず、日常の言語表現の場で用いられている様々な真理表現を、論理的な観点から、統一的に捉えることであった。同じ真理に関する表現である以上そこに

必ず何か共通のものがあるはずである。私は一つの解釈を示し得たと思う。しかしそれは単なる言葉の論理的整理には止らない。その整理の仕方は、必然的に、ある一つの世界の見方を提示せざるを得ないのである。そこに存在するのは**事的な存在者**である。少なくとも、我々が思いを込めて**意味ある世界**を了解しようとするとき**実現する**のはそのような存在者である。そしてそれら存在者に命を賭けて対決し、あるものを承認し受け入れ、またあるものを否認し退ける、その最終的決断の印こそ**真偽の表現**なのである。

### 追 記

予測される反論の一つについて一言記しておきたい。

実現即了解されるところの**事対象**は全てある意味で存在し（物対象の存在についてはここでは触れていない。）他の同じ意味で存在する**事対象**との相関関係によって**真偽**が言われる、と論じてきた訳だが、この場合、“存在”という表現は日常のこの語の使い方とは異なっており、従って、日常言語の使用法を重視するという基本的な考え方にももとると言われるかもしれない。

確かに、**ブケファルス**が地を駆ける（駆けた）事は存在すると言えても、**ペガサス**が天を駆けるという事は普通の意味では存在するとは言えないかもしれない。しかしこの“普通の意味で存在する”とは一体どういう意味なのか。知覚的な事のみを存在するというのならば、例えば、原子核の周りを電子が回っている事や**ピタゴラスの定理**が述べている事は存在するとは言えないのだろうか。実際、この“存在”という表現ほどあいまいで哲学者の危険な玩具になり易いものはない。私が、意味ある事表現の**事対象**は全て存在すると言うことによって意図している存在表現の使い方は、敢て言えば、

-----という事は-----である。

The thing that ----- is -----.

のような形の表現に用いられるような、動詞の補助的な働きに対応するものである。そうして、

-----という事は存在する。

The thing that ----- exists.

のような存在表現は、他のより明瞭な意味を持った表現、例えば、知覚的存在者について語りたいのであれば、

-----という事は知覚できる。

The thing that ----- is perceptible.

のようなもの書き変えるか、当の存在表現をそのようなものとして理解すべきだと思うのである。さてこのように存在表現を補助動詞あるいは *be* 動詞的なもの限定すれば、それによって存在者が一見限りなく増えるように見えたとしても、却て、“真に存在するものは何か。”といった不毛のあるいは疑似的な問いを退けることができるのではないだろうか。しかしこのことは、稿を改めて論ずるに足る重要かつ難しい問題であろう。

#### 参 考 文 献

岩崎武雄 “真理論” (岩波講座 [哲学] 第八卷、1968)

大森荘蔵 “ことだま論” — 言葉と「ものごと」 — ( [講座哲学] 2、東京大学出版会、1973)

大森荘蔵 “宇宙風景の「ものごと」” ( [理想] No. 509、1975)

Ramsey, F. P. “Facts and Propositions” (Proceedings of the Aristotelian Society, Suppl. Vol. 7, 1927)

Strawson, P. F. “Truth” (Analysis, Vol. 9, 1949)

(昭和60年4月30日受理)